

(AAFC 例会発表資料)

2022年8月7日

瀬口 誠

## 「La Folia (ラ・フォリア)」に魅せられて

本日は、イベリア半島発祥の舞曲ラ・フォリアに纏わる歴史と、その美しい旋律を取り入れた作品の幾つかを紹介させていただきます。6月末にクラブに入会したばかりで、例会参加も今回が3回目ですが宜しくお願い致します。

### 記

#### ラ・フォリアとその歴史について

現代に伝わるラ・フォリアの源流は、15世紀頃にポルトガルで発祥した舞曲です。16世紀初頭に書かれた、ラ・フォリアに係わる最古の文献では次のように描写されています。

*ポルトガルの踊りの一種。荷担ぎ人夫に扮装した屈強な男性たちがそれぞれの肩の上に女装した若衆を乗せ、皆が手を高く掲げてタンバリンを叩き、踊り、練り歩く。その響きの騒々しさ、リズムの迅速さは誰もが正気を失っているのではないかと思われるほど。この踊りがフォリア(狂気)と呼ばれる理由がそこにある。*

このように元々は激しいリズムの粗野な舞曲であったものの、16世紀に隣のスペインに伝わり、徐々に緩やかなテンポの優雅で愁いを帯びた舞曲に変化していき、上流階級にも広がっていったようです。それに伴い、スペイン及びポルトガルではラ・フォリアを主題に取り入れた音楽作品が多数現れました。

更に時が移って17世紀から18世紀にかけては、ドイツ、フランス、イタリアなどを中心としてヨーロッパ全域で大流行し、著名な作曲家が競ってラ・フォリアの主題を取り入れた作品を残しました。そのなかには、バロック音楽の傑作として現代でも盛んに演奏され、CD/LPも発売されている作品が少なくありません。それらには、作品のタイトルに「ラ・フォリア」と明示されているものもあれば、ラ・フォリアの呼称には一切言及せず、さり気なくその旋律を取り入れているものもあります。

また、これらの作品に共通する特徴としては、3拍子の主に短調の曲であることと、演奏時間が20分近い曲もあるにも拘らず単一の章で成り立っていることが挙げられます。

そのような作曲家や作品のうち、代表的な例を添付別紙の表に纏めましたのでご覧ください。尚、表に記載した以外にもラ・フォリアを愛し、作品に取り入れた、多数の作曲家が存在したことにご留意ください。

### 本ご紹介する作品について

本日は、17世紀末から現代にかけての作品を、以下の再生順の解説のとおり7曲ご紹介させていただきます。合計の正味演奏時間は大体40分程度です。

どの曲もラ・フォリアの主題を含んでいますので、人によっては「皆似た曲ばかり」とお感じになるかもしれません。そのため、少しでも変化をつけるよう、長めの曲と短めの曲、17-18世紀の作品と現代の作品を交互に再生する予定です。また、主演奏の楽器についても、必ずしも原曲の編成にはこだわらず、同じ楽器の曲が続かぬよう変化をつけています。

- (1) 作品名： ヴァイオリンソナタニ短調 作品5-12 ラ・フォリア  
 作曲者： アルカンジェロ・コレッリ (1653-1713)  
 演奏時間： 11:52  
 アルバム名： グリュミオーの悪魔のトリル&ラ・フォリア (LP)  
 レーベル： Philips  
 演奏： アルテュール・グリュミオー (ヴァイオリン)  
 録音年： 1956年 (モノラル)



日本におけるコレッリの知名度は、バロック音楽愛好家を除けばそれほど高くないと言って良いかもしれません。しかし、17世紀中葉に誕生し、バッハやヘンデルなど一世代あとの作曲家に多大な影響を与えた重要な作曲家であることは確かな事実です。

特に、本作品はコレッリの代表作であるとともに、ラ・フォリアの主題を取り入れた数多くの作品の中で最も知名度の高い、後続の作曲家にとって規範になった作品です。

一方、ヴァイオリン奏者のグリュミオーは、1921年にベルギーに生まれ一貫して同国を中心に活動を続けた、フランコ=ベルギー派ヴァイオリン奏法の大家です。本作品ではグリュミオーが35歳の元気一杯の時の演奏を楽しめます。

### (発表者コメント)

グリュミオーの明るく艶やかな音色の、叙情性たっぷりにヴァイオリンを「歌わせる」

演奏はこの作品にまさにうってつけだと思っています。発表者はこのグリュミオー演奏版以外にも、寺神戸亮やアンドリュー・マンツェ演奏版など、同じく評判高い他アルバムも幾つか保有しています。そのなかで本アルバムはモノラル録音で音質も劣りますが、それでも気が付けばこのグリュミオー演奏版を選んで聞いています。

- (2) 編曲者： グレゴリオ・パニアグワ (1944ー)  
 作品名： フォリアに寄せる祈り  
 演奏時間： 2:27  
 アルバム名：ラ・フォリア (XRCD24)  
 レーベル： JVC  
 指揮： グレゴリオ・パニアグワ  
 演奏： アトリウム・ムジケー古楽合奏団  
 録音年： 1980年 (ステレオ)



グレゴリオ・パニアグワはスペイン在住の指揮者で、マドリードを本拠地とするアトリウム・ムジケー古楽合奏団を率いて、主にスペインの中世からルネッサンス期、さらに古代ギリシャまで遡ったかなりユニークなアルバムを出しています。

ここでご紹介するアルバムの「ラ・フォリア」は、指揮するパニアグワがラ・フォリアの主題を前衛的な味付けも加えて縦横自在に調理し、演奏時間約2分から8分程度の12曲に纏めています。本日は、この12曲のうち、2分半の短めの曲をご紹介します。ハイレベルな演奏と録音を基調としながらも、思わず苦笑したくなるような茶目っ気たっぷりの一風変わったラ・フォリアが味わえます。

#### (発表者コメント)

本アルバムが発表された時、編曲の斬新さ、演奏技術の高さ、更に高品質の録音が絶賛されました。SACD/CDハイブリッド版、高音質XRCD24版、およびLPレコードが発売され、発表者はLPを除く2種類を保有していますが、どちらも非常に高音質であると同時に、微妙に音の性格が異なり甲乙つけがたいです。

- (3) 作品名： ヴィオール曲集第2巻 スペインのフォリアによる変奏曲  
 作曲者： マラン・マレー (1656-1728)  
 演奏時間： 9:32  
 アルバム名：フルート独奏作品集 (LP)  
 レーベル： Claves (スイス)

演奏： ペーター・ルーカス・グラーフ(フルート)  
録音年： 1973年(ステレオ)

コレッリと同年代のマラン・マレーによる本作品も、コレッリ作品に近いぐらいの高い評価を得ています。本作品の原曲は演奏時間が約18分にもなる長い曲ですが、このアルバムでは本来の25小節から16小節を抜粋するなど、9分半に短縮しています。



また、本作品の原曲はヴィオール(ヴィオラ・ダ・ガンバ)のために作曲されましたが、近年はヴァイオリンでの演奏が主流になっています。しかし、ヴァイオリン演奏でのラ・フォリアは冒頭のコレッリ作品でご紹介しましたので、ここでは趣向を変えてフルート独奏による演奏をご紹介します。

一方、演奏者のペーター・ルーカス・グラーフ(1929-)はスイス生まれのフルート奏者・指揮者で、本作品ではグラーフが44歳の油の乗った時期の演奏が楽しめます。

#### (発表者コメント)

発表者は原曲に忠実なヴィオラ・ダ・ガンバ演奏によるアルバムも持っていますが、フルート独奏での本作品も若いころから好きで、今でもレコードやCDを頻繁に聞いています。また、発表者が現在までに聴いた経験のあるフルート絡みの曲の中ではベストと感じているタイトルでもあります。

- (4) 作品名： ナウシカ・レクイエム  
作曲者： 久石譲(1950-)  
演奏時間： 2:55  
アルバム名：映画「風の谷のナウシカ」オリジナルサウンドトラック(CD)  
レーベル： スタジオ・ジブリ・レコード  
録音年： 1984年(ステレオ)



ジブリ映画「風の谷のナウシカ」はご覧になった方も多いのではないでしょうか。ご紹介する「ナウシカ・レクイエム」は、オームの群れが掲げる触手で作られた金色の野の上をナウシカが歩くフィナーレの場面で流れる曲で、やはりラ・フォリアの主題を取り入れています。

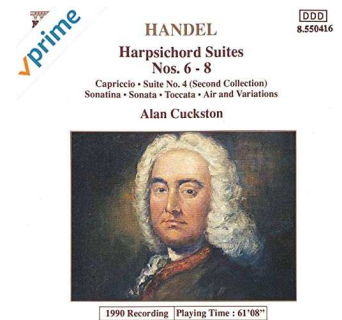
- (5) 作品名： ハープシコード組曲第2巻 第4番ニ短調第3曲サラバンド  
作曲者： ゲオルグ・フリードリヒ・ヘンデル(1685-1759)  
演奏時間： 4:33

アルバム名：ハープシコード組曲第6番-8番&組曲第2巻第4番 (CD)

レーベル： NAXOS

演奏： アラン・カックストン

録音年： 1990 (ステレオ)



この「ヘンデルのサラバンド」として知られる曲は、1733年発表のハープシコード組曲第2巻第4番の中の一曲で、やはりラ・フォリアの主題を取り入れています。既にご紹介のコレッリやマレーの作品とはまた違った、ハープシコードでのラ・フォリアをお楽しみください。

### (発表者コメント)

ラ・フォリアは、楽曲形式のより大きな分類ではサラバンドの一種と位置付けられており、本作品の曲名もサラバンドと命名されています。発表者にとっては、本作品はジャンルを通じての「大好き度トップ10」に入る曲です。

- (6) 作品名： サラバンドーエンドタイトル  
 作曲者： ゲオルグ・フリードリヒ・ヘンデル (1685-1759)  
 演奏時間： 4:07  
 アルバム名： 映画「バリー・リンドン」オリジナルサウンドトラック (LP)  
 レーベル： ワナー・ブラザーズ・レコード  
 演奏： ナショナル・フィルハーモニック・オーケストラ  
 録音年： 1975年 (ステレオ)

本作品は、(5)のハープシコードによる原曲をオーケストラ演奏用に編曲したもので、原曲とはまた違った魅力を持つ、荘厳な迫力ある作品になっています。



尚、スタンリー・キューブリック監督のこの映画は、1976年公開当時、画面の映像美で高い評価を受けました。同時に、映画の舞台となるイギリスの伝統曲や、ヘンデルに加えてバッハ、シューベルト、ヴィヴァルディ、更にモーツァルトなどの名曲が劇中で使用されており、ハイレベルなサウンドトラックの面でも評判になりました。

### (発表者コメント)

当時大学4年生であった発表者も、公開と同時に映画館に飛んでいったのを覚えています。また、本作品は発表者が初めてラ・フォリアと出会った思い出深い作品でもあります。

(7) 作品名： サラバンドーデュエル

演奏時間： 3：11

\*作曲者、アルバム名、レーベル、演奏、録音年は(6)の作品と同一で割愛。

本作品は(6)の作品と同じく映画「バリー・リンドン」の中の曲で、やはり(5)のヘンデル作品が元になっています。但し、フルオーケストラ演奏による(6)とは異なり、コントラバスとバスドラムの二重奏による演奏で、低音が押し寄せてくるような緊迫感に満ちた作品になっています。

**(発表者コメント)**

曲名の「サラバンドーデュエル」のデュエル(Duel)とは「決闘」の意味で、主人公のバリー・リンドンが決闘に臨んでいる場面で使われています。画面の緊迫感をそのまま音楽に移したような演奏で、これほどの低音だけで成立っている作品は発表者としては他に知りません。因みに、長年、発表者のスピーカー購入の際は、本作品を低音再生能力チェックのためのリファレンスディスクの一つに使っています。

以上